

戯曲『ファッショ細菌』の成立について

— 原作主人公のモデルに関する考察を中心に —

武 継 平

Abstract

This paper researched a famous anti-war script written by Xia Yan in 1942. About Xia Yan, Japanese academia is not unfamiliar to him. But the researches in the past almost interested his works written in Shanghai in the nineteen thirties, such as “a bonded laborer”(1935), “Sai Jinhua”(1936), “Under the roofs of Shanghai”(1937). If we compare Xia Yan with the other famous literary contemporaries such like Lu Xun, Guo Moruo, Yu Dafu, Tian Han, Mao Dun, and Shen Congwen, we will find that his literary works have obvious class consciousness, because he was also a member of the Communist Party in charge of cultural leadership. The script “Fascist Bacteria” was written in the war of resistance against Japan in 1942, which shows a strong anti-fascist tone. The protagonist Dr. Yu Shifu is a Microbial scientist, who believed that “scientific universal” and “science supremacy”, and be indifferent to the political and current affairs. He gradually awakened in the war, and finally agreed to participate in the war to defend the motherland as a doctor who works in the The Red Cross Hospital. The script describes the complex process about the big change of hero’s thought.

In this paper, through the historical investigation, we found that when the author Xia Yan wrote the script, the hero Dr. Yu had actually a prototype. And we also found the historical reasons about why author had to studiously avoided talking about this issue.

目 次

はじめに

1. 戯曲『ファッショ細菌』の成立
 2. 『ファッショ細菌』の作者夏衍について
 3. 『ファッショ細菌』に関する考察
 - 3.1 登場人物について
 - 3.2 ストーリーの展開から見る文学表現のリアリズム
 4. 原作主人公のモデルについて
- 結びに代えて：『ファッショ細菌』に見る反戦的性格

はじめに

1940年代初頭、中国演劇界トップレベルの脚本家、舞台監督および俳優たちが日本軍の占領下にある北京や上海から脱出して、抗日民族統一戦線の「大本営」である大都市重慶に集まっ

てきた。そのため演劇は重慶で空前のブームとなり、民衆の精神生活を豊かなものにしたのである。

ところが、中国現代文学史上において、ある種の怪奇現象が起きたのもこの時期であった。抗戦が終了する1945年までの間、50余りの劇団によって劇場で上演された演目の数は100にもものぼるということだが、最も人気を博したのは郭沫若の『屈原』（歴史劇、1942年4月初上演）と呉祖光の『風雪夜婦人』（新劇、1942年夏初上演）だった。蘆溝橋事件勃発以来、中国人のところに戦争の暗雲が重くのしかかり、中央政府の所在地の重慶でも時々日本軍の空襲や爆撃の被害を受けていたために、けっして戦争と無縁の土地ではなかった。それにもかかわらず、重慶の演劇界では、直接抗日戦争をテーマとする演目はなぜか意外と少なかった。

このようなときに、重慶にいた夏衍は、1937年のヒット作『上海の屋根の下』を世に送り出したあと、新たに『ファッショ細菌』¹という五幕戯曲を書き上げ、そして世に問うた。抗戦激励を目的とするプロパガンダ劇ではないが、抗戦期の知識人の人間性や生き様を真正面から捉えた舞台新劇として観衆のところを驚づかみにしただけでなく、後々数多くの知識人の人生転換のきっかけとなったのである。

本論では四つの断面から夏衍の『ファッショ細菌』を実証的に考察し、とりわけ先行研究の中で看過されたとと思われる作品創作の背後にある歴史的事実を明らかにするのを目的とする。

1. 戯曲『ファッショ細菌』の成立

『ファッショ細菌』は中国現代劇作家夏衍（Xia Yan）が抗日戦争中に中華民国中央政府の所在地である重慶市で創作した五幕戯曲である²。初出誌は1942年12月に重慶で発行された『文化生活』第3巻第3期とされているが³、入手困難であるため、1946年1月上海開明書店から出た劇作の単行初版本を今回考察するテキストとした。原作の末尾に作者は脱稿の日付をわざわざ「一九四二年‘八・一三’の四日後」と記している。「夏衍劇作社」が編集し、そして当時中国トップレベルの出版社だった開明書店に印刷製本および出版流通を依頼したものであるが、表紙のサブタイトルとして「夏衍劇作集の一つ」と書かれているものの、作品は戯曲『ファッショ細菌』一本しかない。単行本の収録作品からみれば、「劇作集」の要素は整っていない。ただし、本作『ファッショ細菌』以外に、『跋に代えて（一）——ねずみ、シラミと歴史』と『跋

1 中国語表記は『法西斯細菌』となっている。和訳には従来『ファシズム細菌』と『ファッショ細菌』との二種類があるが、本考察では現在通用する後者を踏襲することにした。

2 共産党系の劇作家夏衍に関する研究は決して少なくはない。『ファッショ細菌』という作品に関しては、抗戦的性格を有する代表作品として作品名は常に言及され、そして多くの評論があるものの、作品に関する実証的研究は未見である。抗日色が濃い文学はあまり研究されていない日本で資料調査を行った結果、横井成行『劇曲「ファッショ細菌」(夏衍作) 翻訳・紹介: 日本史教材としてのアプローチ』の一点しかないことが判明した。

3 初出は未見である。しかし、1988年東方書店から出た夏衍原作、阿部幸夫訳『ペンと戦争』で触れられている。

に代えて(二)——口紅、油絵と習作』という二編の跋文が付録として添付してある。そこから書誌情報のある程度読み解くことが可能である。『跋(一)』の執筆は「1942年10月17日上演の日」、『跋(二)』の場合は同年「10月28日上演中」と記されている。原稿が書き上げられた「一九四二年‘八・一三’の四日後」、つまり1942年8月17日から舞台演出用の脚本に書き換えられ、そしてリハーサルを経て初上演(1942年10月17日)まで、わずか2カ月しかなかったということになる。重慶は前線ではないとはいえ、緊迫した抗戦情勢に対応を迫られる宣伝工作の必要によるものと見受けられる⁴。

一方、作品の最後に記された「八・一三」というのは、1937年8月13日に勃発した「第二次上海事変」のことを意味しているが⁵、「蘆溝橋事件」(同年7月7日)の1ヵ月後、日本軍の上海侵攻戦が始まった日であった。「一九四二年‘八・一三’の四日後」に書いた作品ということは、4年前の第二次上海事変を記念するために書いたものだという意味合いを有するので、末尾の日付は抗戦的な性格を作品に持たせている。

ところが、この作品では「八・一三」第二次上海事変時の中日両国軍の正面衝突や戦場と化した街の様子などには直接触れてはいない。上海陥落は1937年11月12日であった。国共両党の再度の合意によって「抗日統一戦線」が新たに結成された。上海は日本軍の占領下にあり、国共抗日統一戦線側から見れば「孤島」となった。『救亡日報』⁶などは地下に潜伏しはじめ、編集長を務める夏衍ら共産党系の文化人は12月20日に上海を脱出し香港へ避難した。夏衍は「国統区」⁷で文化活動をする共産党上層部の職員であるため、上海脱出後、香港および桂林にも滞在したことがある。それらの都市も次々と日本軍の手に落ちてしまうことになるが、夏衍はいつもその前に脱出しているため、直接日本軍や地方傀儡政権との接触はなかった。つまり、日本軍との接触は人から聞いたことがあっても自ら経験したことはなかった。原作が書き上げられた時点では上海はすでに日本軍の占領下にあり、劇場公演時に書かれた『跋に代えて』を読んでもわかるように、『ファッショ細菌』という作品は抗日戦場の後方にある重慶市で執筆されたもので、舞台公演は重慶、桂林両市の劇場で何度も行われた。

では、作品の創作動機や経緯に関しては今回の考察で『跋に代えて』および複数ある当事者回想記の中から信憑性の高い情報を得ることができた。

前述のように、この『ファッショ細菌』という五幕劇が単行本としてはじめて出版された際、作者はそれまでに舞台上演のときに書いた『跋に代えて』を作品の後につけた。二編の跋文は、作品の創作動機、創作のきっかけおよび舞台劇として公演する経緯などに多少触れている。作

4 1946年1月に出た開明書店初版本は明らかに初出誌『文芸生活』の掲載内容を元に版組みされた。時間をかけて吟味して修正する余裕がなかったためか、脱字や誤植が少なくないだけでなく、ローマ字で書かれた日本語にも間違いが多い。

5 1937年8月13日～11月12日の間に起きた国民党政府軍による抗日上海保衛戦。「淞滬戦役」ともいう。同年11月12日上海陥落。

6 1937年8月24日創刊、民国政府側は郭沫若を新聞社社長に、共産党側は夏衍を編集長に任命した。

7 当時は日本軍の支配下にある「淪陷区」に対して、民国政府の支配下にある地域は「国統区」、さらに共産党軍隊の支配下にある地域は「解放区」と呼ばれていた。

者は、文中で「桂林から重慶にもどり」、そして霧の都重慶市の名所である「北温泉」で執筆し、そのあと舞台で何度も上演させたことに言及し、そしてそもそもこの五幕戯曲を書きたいと思ったきっかけは、桂林で医学者 T 氏との偶然な再会に関係があると振り返っている。

「桂林では、まったくの偶然だが、10年ぶりに旧友の T 氏との再会を果たした。彼は大後方に行って医療関係の仕事をするつもりで、北平⁸協和病院から逃げてきた。彼はあくまでも一人の医者である。重慶に着いてから彼は友人 Y の紹介で W を知り、正式に受け入れられるまでは香港アメリ病院で働いていた、一人の医者として」⁹。

以上が跋文から引用した言葉である。作者は10年ぶりで旧友と再会した経緯について触れているが、T 氏とはいったい誰のことなのかについてはなぜか明言を避けている。

作者は次のように書き続ける。

「北平、上海、香港、そしてより多くのところには、心底から科学の超然性を信じてやまない善良な医師たちが大勢いる。しかし彼らはファシストたちによって科学の宮殿から戦乱の現実の真ただ中に追い出されてきた。彼らは実験室を離れ、顕微鏡から離れ、視線を傷だらけの世界に移すことを余儀なくされた。このような悲劇は医学界にはかぎるまい。かつて芸術のための芸術があったのと同様に、自然科学の分野においては、科学のための科学を信じる科学者もいると思い、一人の善良な細菌学者をモデルにして戯曲の中で自分の心にある英雄像を描出しようと決めた」¹⁰。

戦争という非日常的な環境の中で、善良な科学者がいかに生き抜いたかを舞台上で再現しようと思ったのだと自ら吐露している。

ところが、晩年出版した回想記『懶尋旧夢録』の中で作者夏衍は、「この戯曲の創作にあたって丁瓚と呉在東両氏の協力と手助けをいただいた。そして初公演の際に二人とも見に来てくれた」¹¹と補足し、『ファッショ細菌』を書いてから40年も経ったあと、はじめて「T 氏」と「W 氏」の実名をあげた。

しかし、夏衍は『ファッショ細菌』の主人公を丁瓚または呉在東をモデルにして書いたのだなどといったようなことは一度も口にしたことはない。回想記の表現の曖昧さもいままでさまざまな憶測を呼んだ原因であろうが、疑問は残る。もはや問題は「T 氏」とは誰かではなく、「主人公のモデル」がいたか否か、いたなら誰なのか、であるが、従来の研究の盲点となったこのことについて今回の考察で事実関係を裏付ける新たな史料が出たので、本論の「4. 原作主人公のモデルについて」の部分で詳しく述べたい。

作品創作の経緯に関しては、さらに次のような二つのエピソードがある。

一つ目は、最初は『ファッショ細菌』という戯曲名ではまず当局の検閲には通らないのではと懸念して審査に出す直前に『第7号气象観測気球』に急遽変更したが、国民政府政治部第三

8 北京市の旧称。

9 『法西斯細菌』138頁、開明書店1946年出版。

10 夏衍『懶尋旧夢録』326頁、1985年7月香港三聯書店初版。

11 前掲『懶尋旧夢録』329頁、1985年7月香港三聯書店初版。

庁の長を務める郭沫若の支持を得てそのまま通ったということ。

もう一つは単行本出版時のトラブルである。出版に最初手を挙げたのは美学出版社だった。ところが、原稿を当局の「新聞検査処」（検閲部署）に提出してから検閲にひっかかり、その後梨の磔となった。開明書店から出たのは抗戦終了後の1946年1月であった¹²。国共両党は抗日統一戦線を結成させたとはいえ、民国政府は共産党系作家の文芸作品に対して依然として警戒し、検閲も厳しかったことが窺える。

さて、次は作品の創作動機について見てみよう。

『ファッショ細菌』が発表された2年後、作者は同一作品をめぐる評論への応酬で次のように披露している。

「ここ十数年来、ファシズムの毒が世界の大半を侵食している。われわれの幾千万の同胞が殺害されまたは奴隷にされた。彼らは家を失い、流離いつつも苦しみを訴えるところはない……。全世界の良知ある知識人にとって、ファシズム反対は人に委ねることができない天職となった……。俞実夫という人物が生きている世の中は、中国人科学者にとって正に必然性と普遍性のある環境ではないか。」¹³

作者の主張は非常に明確である。つまりこの作品を書き、そして舞台上で上演させる「創作動機」は、知識人が自らの「天職」とすべき「ファシズム反対」以外の何ものでもない。作者自らの一言で作品には反戦的な性格が賦与されている。

以上作品の創作をめぐる動機やきっかけなどについて述べてきたが、実はもう一つ気になる点がある。

それは、夏衍はもともと明治専門学校（現在の九州工業大学の前身）工学科留学生出身で、魯迅や郭沫若らと同様に、留学中に電気工学を断念して文学の道を選んだわけだから、微生物や寄生虫の研究などが分からないのは当然だと思われる。基本的には文学者である彼にとって、衛生生理学、病理学および医学等の専門知識がなければ『ファッショ細菌』は書けるはずもなかった。では、創作に必要な不可欠な専門知識はいったいどこから得たのか、という点は気になる。

この点に関しては、夏衍は「ほとんど近代アメリカの細菌学者で教授、詩人でもあるハンス・ジンサー（Hans Zinsser, 1878-1940）が1934年に書いた著書“Rats, Lice, and History”を熟読して得た」¹⁴というふうには語っているが、作品の主人公にはモデルがあり、しかも五幕劇は基本的にはそのモデルとなる謎の人物の実話に基づいて書かれたという関連付けを極力回避しようとしている姿勢が手に取るように分かる。この点に関して作者が長い間ははっきり言わなかったのは何かを隠すため以外には考えられまい。筆者の推測にすぎないが、ボールに包まれた当該人

12 前掲『懶尋旧夢録』328頁～329頁、1985年7月香港三聯書店初版。

13 夏衍「公式。符咒與“批評”——『法西斯細菌』代跋之三」、『辺鼓集』、美学出版社1944年10月初版。

14 『法西斯細菌』139頁、開明書店1946年出版。ここで夏衍が記した書名は不完全である。正しくは“Rats, Lice, and History — A study in History”。日本語訳は、1966年にみすず書房から出版されている。なお、1984年に新装版がでている。H・ジンサー著、橋本雅一訳『ネズミ・シラミ・文明——伝染病の歴史的伝記』（みすず書房、1966年）。

物が、もし敵軍占領下の都市（たとえば上海）にいるなら、この作品が敵も味方も注目する抗日戦争の大後方の重慶で公演されまたは作品の掲載誌が全国に流通したら¹⁵、その人物は即反日分子のレッテルを貼られ、命を危険にさらすことになるだろう、と夏衍は危惧していたからではないか。

本論文の後半で詳しく述べるが、本考察で判明した史実の一つは、その謎の人物が実在し、医学部出身で医療機関に勤め、日本軍占領下の上海で1945年8月まで「上海自然科学研究所」¹⁶で細菌研究をしていた陶晶孫のことである¹⁷。その経歴は彼の人生に払拭できぬ大きな汚点を与え、新中国誕生後長年その人物は「漢奸」¹⁸よばわりされていた。『ファッショ細菌』の作者夏衍とは、1920年代末からの付き合いで、1990年代の半ば中国共産党上層部にいる夏衍の一言で冤罪として処理され、やっと名誉回復となった。

2. 『ファッショ細菌』の作者夏衍について

ではつぎに、戯曲『ファッショ細菌』の作者がいったいどんな人物かについて見てみよう。

中国の文壇では、1920年代末から京都大学に留学した第二次創造社同人たちが持ち帰った社会主義思想や同時代の日本プロレタリア文学の影響を強く受け、もともと個性を謳って文壇デビューした複数の文学グループが合流し、そして急成長を遂げ、1930年3月には全国規模の「左翼文学」の陣営を結成した。共産党員である夏衍¹⁹は「中国左翼作家連盟」中央執行委員会委員、そして中国共産党中央宣伝部文化工作委員会委員を務め、同時に『芸術』と『沙翁』という二つの月刊文芸雑誌を主宰しつつ、上海で精力的に演劇運動に参加し、ルポルタージュ、映画シナリオ、そして戯曲（話劇）も多数書いていた。

1937年蘆溝橋事件勃発直後、上海文芸界救亡協会が結成され、夏衍は理事に選出された。その後の国共合作期には、夏衍は、国民党政府政治部宣伝広報部門の最高責任者（民国政府第三庁の長）を務める郭沫若の補佐として、『救亡日報』、『華商新聞』および『新華日報』の編集長を務め、統一戦線の抗日宣伝活動で上海、広州、桂林および香港など各地に転々としていた。重慶滞在時は直接周恩来の指示を受ける中国共産党南方局文化部副部長のポストに就き、郭沫

15 実際は五幕戯曲『ファッショ細菌』は戦時中の1942年からの数年間、重慶、桂林など複数の都市で上演されていた。

16 佐伯修の調査によれば、1931年4月1日より日本政府が外務省を窓口にして上海で設立した在支細菌研究基地。職員は主に当時日本国内から現役の帝大教官を派遣していたが、有力者の推薦で中国人研究員も数名現地採用していた。1900年の中国義和団事件で英、仏、独、米、日、露、イタリア、オーストリア八カ国連合が『北京議定書』により清国に課した「団匪賠償金」（「庚子賠償金」）を財源とする。佐伯修『上海自然科学研究所——科学者たちの日中戦争』18頁、（宝島社、1995年）。

17 陶晶孫、本名は熾、生卒年は1897.12.18~1952. 2.12。江蘇省無錫生まれ、1906年来日、1923年九州大学医学部卒業。中国現代文学グループ創造社初期メンバー。1928年3月帰国。1931年から1945年まで上海自然科学研究所に勤め、1952年2月12日千葉県で肝臓がんで亡くなる。

18 戦争中日本軍に協力した中国人変節者のことを中国では「漢奸」と呼ばれる。

19 本名は沈乃熙、字は端先、1900年10月30日生まれ、1995年6月12日没。1927年に中共に参加した。

若の右腕となって「国統区」の抗日宣伝や文芸工作の指導に当たっていた。一方、文学者としては、映画シナリオと戯曲の創作との二ジャンルで活躍していた。映画に関しては、シナリオの創作はいうまでもなく、映画撮影及び製作にも自ら関わり、30年代において『狂流』（1932年）、『春の蚕』（1933年）、『風雲児』（1935年）、『お年玉』（1937年）の4本を書きあげ、そしてそれらを次々と映画化させた。

夏衍の戯曲作品といえば、30年代半ばから1945年抗日戦争終了までの10年間が一番多作であった。『都会の一角』（1935年）、『賽金花』（1936年）、『上海の屋根の下』（1937年）、『一年間』（1938年）、『罪滅ぼし』（1938年）、『娼婦』（1939年）；40年代には『心防』（1940年）、『愁城記』（1940年）、『水郷吟』（1942年）、『ファッショ細菌』（1942年）、『離離草』（1944年）、『芳草天涯』（1945年）などを発表し、そして別途単行本を多数出版している。

本考察の対象となる戯曲作品『ファッショ細菌』は、抗日戦争という時代背景のもと、戦争という言葉が持つ一般的な意味における軍隊の武力衝突ではなく、日本軍占領区域にとどまっているが科学で祖国を救う信念をもつ中国人科学者の運命と心の動揺に焦点を当てている。作者夏衍は文芸運動を指導する立場にしながら、みずからも文学創作活動に従事する共産党の高級幹部の一人である。彼は特定された典型的な環境の中の典型的な人間像の再現を使命として、できるかぎり実生活のリアリティを重視するように努めていた。味方を極端に英雄化し、敵を限りなく矮小化する赤一色の抗日文学の中では、非常に注目される異色の存在である。

3. 『ファッショ細菌』に関する考察

3.1 登場人物について

五幕戯曲『ファッショ細菌』にある登場人物の総人数は20名である。舞台演劇にしては決して少ないとはいえない。科学者ドクター兪が中心人物であるということは一目瞭然だが、ストーリーの展開は兪とその他の登場人物とで構築されているので、人間関係で大雑把に分類すると、次のようになる。

〈登場人物〉	〈人数〉
主人公兪実夫、妻静子、娘寿美子	3
兪の同郷友人趙安涛、妻銭琴仙「ルシー」；弟銭裕、恋人ジュニー・馬；同郷秦正誼、近所の女性	6
趙夫妻の運転手徐阿発、兪家の政婦張おばさん、広東人下女アマー、その他使用人2名	5
金社長、ミスター葉、若者の潮さん	3
日本兵甲、乙、丙	3

まず、登場人物がそれぞれ何のために設定されたのか、という点を見よう。この問題を明らかにすれば、違う側面から作品の創作意図を解明するカギが得られるかもしれない。

この作品の創作意図に関しては、従来の主張は2種類ある。

まず「侵略戦争がいかに中国人知識人集団の生存環境を破壊したかを訴え、より多くの知識

人の抗戦参加を呼びかけようとしている」、という読み解きかたである。

もう一種類は近年中国の夏衍研究でよく見られるが、この作品には戦時下によくあった抗戦のプロパガンダ色が薄く、作品の力点は明らかに「典型的な環境にいる典型人物の人間像の描出にある」と主張する観点である。

登場人物の設定理由や作品の創作意図などを突き止めるには、それについて読者や評論家がどう感じるか、どの説が正しいかなどをいくら議論しても問題解決にはならない。むしろ作者の言説を裏付けることができるものはないかを明らかにする研究のほうが重要だと筆者は考えている。したがって、この問題に関して本論文は先行評論に対して異を唱えるのではなく、作者の言説を中心に考察を行うことにする。

社会主義中国が誕生して間もないころ、作者夏衍は『ファッショ細菌』について次のように振り返ったことがある。

「登場人物をいうならば、俞実夫は中心的な存在で、他は副次的なものである。趙安涛も秦正誼も主人公の存在をより一層際立たせるためにある。ほかの登場人物の設定も同様で、ストーリーの展開の必要に応じて完全にフィクションで構築したものである。」²⁰

伝染病や疫病に関しては、「チフスはいまだに死滅していない。人類の愚昧と野蛮さには活動するチャンスを与えさえすれば、おそらくそれは今後幾世紀も存続しつづけるだろう。これは『Rats, Lice, and History』の結語でもあるが、わたしの創作動機が何かといえ、この言葉を借りて表現したい」²¹。

少なくとも作者本人はこの戯曲は俞実夫という一人の科学者のために描いたものと自覚している。錯綜する人間関係の中で、主軸的な存在はたった一人、つまり主人公の俞実夫である。複数の知識人の異なる人生選択を書いたという見方もあろうが、それよりも俞実夫一人の科学者の思想の変化を文学で再現しようとしていると筆者は読んでいる。

ところで、作者の回想にいきなり出てきた「愚昧」と「野蛮」という言葉だが、文脈から考えれば論理性の欠如や強引さを感じずにはいられない。作者の発想があくまでも「ファシズム＝侵略戦争＝愚昧・野蛮」という持論に基づいているから、「病原菌」や「伝染病」といった言葉はまさにファシズムの「愚昧・野蛮」さにつながっている、という点を指摘しておきたい。

愚昧・野蛮、ファシズム、侵略戦争、疫病という5つの個別概念は次のように夏衍によって関連付けられたのである。

「愚昧と野蛮は何か？ 常識を有するものはきっと貧困や牢獄または戦争のことを連想するだろう。実は、これらはすべてファシズムとは切っても切れない関係にある。伝染病に関しては、現代医学ではその予防と治療法がある。少なくともその病状の悪化を阻止することができる。しかし、ファシズムによる侵略戦争のせいで、医学技術の発展は妨げられ、疫病の伝染も助長された」²²。

20 夏衍回想記「関於『法西斯細菌』」、『新観察』1954年第15号。

21 「ネズミ、シラミそして歴史——『ファッショ細菌』跋その一」、『法西斯細菌』139頁、開明書店1942年1月初版。

さらに、夏衍は『ファッショ細菌』について回想記を書き、次のように触れている。

「この戯曲にいささか意義や価値があるとすれば、わたしは作品のモチーフにあると思っている。つまり、科学のための科学、技術のための技術に反対し、科学を政治から切り離し政治から逃げてはいけないと主張している」²³。

この作品では、戦時下において俞実夫という人物が代表する中国人科学者の生きざまや人間像が写実に近い手法で描き出されている。「ファシズムを根絶させなければ戦争がなくなるらない。戦争がある限り伝染病が広がり、医学の進歩はあり得ない」という論理が、この作品のモチーフだと言っても過言ではない。

筆者は、この五幕戯曲は、このような創作意図に基づき、中国人知識人の「典型的人物」（俞実夫）の思想変貌を記録し、または再現した作品である、というように位置づけたい。

3.2 ストーリーの展開から見る文学表現のリアリズム

作品の舞台は主に上海、香港および桂林の三箇所である。これらの都市は1931年から1942年までの間、次々に日本軍によって占領され、そしてその支配下に置かれた。

主人公ドクター俞は日本で博士号を取得した細菌研究者で、寄生虫研究で日本の学界でも高い人物である。東京のとある医療機関に勤めながら良妻賢母の日本人妻静子と娘寿美子三人で暮らしているところから幕が上がる。

〈第一幕〉舞台は東京

1931年夏以後、中日両国関係の悪化がエスカレートする一方、日本は満州事変を起こした後、中国東北部に大量増兵し、中日間は一触即発の状態が続く。

主人公ドクター俞のように卒業して研究機関で働く在日中国人たちにとって、学問研究が続けられる環境はすでに崩壊した。帰国するかそれとも開戦後も敵国にとどまって研究を続けるか、彼らはジレンマに陥る。ある日、ドクター俞のところに上海自然科学研究所から一通の招聘状が届き、俞は友人の反対をよそに、赴任することを決意する。

第一幕の見どころは悩む主人公の決断だが、なぜ悩むのかを読み解くのがポイントである。

満州事変後、日中間で戦雲が垂れ込める緊迫した情勢の中で、細菌学者ドクター俞は帰国を選択し、日本政府の細菌研究機関である上海自然科学研究所の招聘に応じる。全面戦争がいつ勃発してもおかしくない状況のなかで、革命活動家郭沫若の場合は、妻の国が一瞬のうちに敵国に変貌し、帰国は敵国と戦う民族戦線に加わるという意味を持っていた。しかしドクター俞の場合は違う。上海自然科学研究所というのはフランス租界に囲まれる日本租界のようなところなので、事実上中国の中の日本を意味する。そのため当時の中日関係下では地元住民の目の敵にされやすい場所でもあった。言ってみれば、もともと戦乱の地を逃れるためだったが、結

22 前掲初出と同じ。

23 同注13。

局虎口を逃れて竜穴に入るようなものとなった。ところが、ドクター兪は政治には一切関心がない。彼から見れば、科学は国境があるものではない。科学さえ進歩させれば、同胞たちを病死から救うことができる。自ら選んだ人生の道は他の知識人同胞と異なるが、「国を救い、民を救う」目的は同じだと彼は信じている。

このプロットですぐれた文学的技量を見せたのは、一人の科学者のこころの純粹さに関する表現ではなかろうか。あれだけ複雑な思考回路を持つ科学者は個と集団、そしてアイデンティティとナショナリティのような問題を思量する際、直線的に考えてしまう単純な思考パターンしか持たない。そもそも日中関係の悪化が日々エスカレートする険悪な国際情勢を背景に、日本の細菌研究機関を上海で設立する日本政府の思惑など、ドクター兪の頭には浮かんだこともなかろう。そのとき、彼は全人類のためワクチン研究を続けたい一心で、たとえ祖国で漢奸扱いされてもしかたがないという覚悟ができていたのであろう。「一流研究機関だから優秀な人材は大勢いるだろうし」、「研究用図書や文献資料および実験機材も完備している」というプラグマティックな理由で、彼の人生に大波乱をもたらした重大な決断を取ってしたのは、心の中でナショナリティを超越したアイデンティティをしっかりと持っていたからではないだろうか。

〈第二幕〉舞台は1937年8月下旬の上海

ストーリーは「フランス租界の西端にある」上海自然科学研究所の兪宅の写実から始まる。ドクター兪は自然科学研究所に赴任してから6年になり、娘寿美子（9才）は研究所近くの楓林橋小学校に通う小学校2年生である。中日両国開戦後、「八・一三」上海攻略戦が一週間も続いた日。

上海はすでに日本軍の占領下にある。自然科学研究所は外国人警察に守られているフランス租界にある。有刺鉄線や高い土塀に囲まれる静かな環境とはいえ、人口密集地の徐家匯にあるため、市井から完全に遮断されるのが難しい。佐伯修氏によれば、1932年の秋、上海では「反日」、「抗日」集会は頻繁に開催され、「日本製を買わず」、「日本人に食料を売らず」、「日本人に雇われず」をスローガンとする市民運動が盛んになり、中国人の配偶者となった日本人を含む上海在住の日本人は日常生活を圧迫され日増し苦しくなっていた²⁴。

ドクター兪は依然として毎日研究に没頭する。妻は白い目で見られ、家政婦でさえ日本人に雇われるだけで迫害されかねないといって辞めてゆく。娘寿美子も近所の子供たちにいじめられ、日本人を母に持つことを恥じて名前を「兪寿珍」に改名し、もうここには住むのがいやだと泣き出す。

このような環境に居づらくなった兪は、毎日砲声が聞こえる中で、つつが虫病（scrub typhus）の感染媒介体とされるノミ、ダニ、シラミの研究に余念はないが、友人の趙からイギリス領の香港について研究を続けたらと勧められた。香港にいけば、自分の研究も続けられるだけでなく、中国人の良心の呵責も受けずに済むし、娘もいじめられずにすむと思うと、ドクター兪は

24 前掲佐伯修『上海自然科学研究所——科学者たちの日中戦争』98頁、99頁。

動揺した。

ここでは、夏行の描写はまさに写実に近い。主人公ドクター兪のモデルとなる陶晶孫の一家は事変当時すでに無錫から上海へ生活の本拠を移した。まだ幼い三男にとって上海の最初の記憶は母の国が父の国に責めてきた戦乱中大人の背中に負おわれて街中を逃げ回ったことと耳をつんざく砲声だったという。「この砲弾はお前のお母ちゃんの国が撃っているのだぞ」と家政婦張おばさんに告げられたとき大ショックだったということである²⁵。

〈第三幕〉舞台は1941年9月の香港

ドクター兪一家はついに上海を脱出して香港にやってきた。兪は病院勤務医として働く。なんとか家計は成り立つが、期待していたつつが虫病の感染予防に関する継続研究ができる仕事に就かず、結局勤務医を辞めて自宅で研究を続けることにした。妻静子は中国語が堪能で日本人であることはばれてはいないが、かつて東京の中国人留学生が感じたように、毎日周りの人の目線を針や刺のように感じる。一方、兪の一番の友人で、政治家になる夢を持ちつつなかなか実現できない趙安涛も戦争を逃れ、金持ちの娘と結婚して香港に来た。彼は初志を変えてビジネスの世界に転身し、南洋向けの自動車輸出販売で成功する。

このとき、兪は日本軍が中国北部で細菌戦の準備をし、実際ペストやコレラ菌をばらまいたことをニュース報道で知り、それまで自分の中で信じていたものが崩壊しはじめる。温和な性格でひたすら沈黙を守り続けてきた彼の口から発したことは、「まさに人類の墮落ではないか」の一言であった。

〈第四幕〉舞台は1941年12月下旬の香港

【第一部】1941年12月8日、太平洋戦争が勃発。日本軍はイギリス軍の極東の要衝であった香港への攻略作戦を実行する。2週間後、香港は日本軍の統治下に入る。

日本軍攻撃の砲弾が兪宅の近くで炸裂し、停電、断水、食べ物もない状態が続く。兪は「日本人は本当に気が狂った」と悲しんで嘆く。

第三幕では、作者はアメリカ人細菌学者ハンス・ジンサーの名言を借りて作品の命題を打ち出している。「伝染病と戦争は一卵双生児のようだ。戦争が起きたあとは必ずチフスやコレラおよびあらゆる伝染病が蔓延する」。従って「チフスや伝染病を根絶するにはまずファシズムを撲滅せねばならない」²⁶。「太平洋戦争が始まって数ヶ月、ある新種ウイルスの急速な蔓延で世界の彼方此方で数千万人の人々が命を奪われた。この新しいウイルスの感染媒体はネズミではなく、ノミやシラミでもない。人間そのものである。そのウイルスの名前はファシズムだ」²⁷。

この部分ではじめて「ファッショ細菌」という作品名の意味、そして「チフスと政治との関係」が解明される。

25 澤地久枝『続・昭和史の女』文藝春秋1983年5月号。

26 『法西斯細菌』98頁、開明書店1942年1月初版。

27 同書99頁。

【第二部】：香港陥落二日後。ストーリーの展開はクライマックスへ突入する。

三人の日本人武装兵がドクター兪の自宅に押し入り、金品や顕微鏡を強奪し、細菌培養中の実験機器を破壊する。それを阻止しようとする兪は殴打される。静子は自分が日本人であることを告白するのを必死にこらえ、性的侮辱を受ける。一方、日本兵の乱暴を見るに忍びず止めようとする趙の義弟銭裕はその場で射殺される。

「あなたまで人格を侮辱され、裕も殺されました。これほど惨めで辛いことはありません。しかし、あたしがもつつらいのは、同胞の日本人が公然と強奪や強姦、無差別殺戮などといった非人間的なことをしているのを自分の目で見たことです……」²⁸

という静子の悲痛な叫びが響く中で幕が下りる。

静子の叫びは作品に明らかな反戦的性格を与えた。これこそ作者が読者や観衆に伝えようとする最重要メッセージではあるまいか。

事実関係に関しては、1987年冬に夏衍の晩年作『懶尋旧夢録』の邦訳が日本で出版された際、東方書店の依頼で書かれた『読者へのあいさつ』によれば、香港陥落後、作者本人は自宅で武装した日本兵に強奪された被害体験を持っている。実際自宅は日本兵に何度も乱入され、「時計、万年筆、それに身に着けているスーツの上着まで強奪された」²⁹ということである。

ひたすら研究ができる静かな環境を求めて妻の国日本を後にし、そして祖国を離れてイギリス領の香港に逃れてきたドクター兪は、日本兵から乱暴されることで、感情的には戦争とファシズムに対する恨みが頂点に達していく。

〈第五幕〉 舞台は1942年2月下旬の桂林

香港を脱出して中国奥地にある桂林に来たドクター兪一家と友人たちはそれぞれ人生の再出発をする。兪はすっかり科学至上の夢から目覚め、日本兵に殺害された好青年銭裕が言った「ファシズムという人類最大の伝染病を根絶しない限り、中国の近代化は実現できそうにない」という観点について賛同するようになる。彼は戦場の後方にある赤十字病院の要請を快諾し、医者として抗戦に参加することを決意する。

4. 原作主人公のモデルについて

五幕戯曲『ファッション細菌』には登場人物が20名もいる。実際のモデルがいるかどうかで分類すると、主人公である兪実夫と日本人妻静子の二人はモデルがいるが、他の作中人物はすべて架空であることが今回の考察で明らかになっている。

では、実際のモデルがいると思われる主人公について出来事、事件発生の場所についてどこまでが事実に沿った部分か、またフィクションはどこなのかを整理してみよう。

28 同書120頁。

29 夏衍『読者へのあいさつ』、阿部幸夫訳『ペンと戦争——夏衍自伝』vii頁、日本東方書店1988年6月出版。

まず主人公兪実夫について見てみる。

先行研究文献を丹念に調べたところ、作者夏衍が『ファッショ細菌』の跋文で言及した10年ぶりに桂林で会った医者「旧友T氏」と、重慶で「友人Yの紹介で知ったW」との二人が、当時北平協和病院から桂林に逃れてきた丁瓚（生卒年：1910~1968）医師と呉在東（生卒年：1905~1983）医師と主張する研究者はいるが³⁰、主人公にモデルがあるかどうかという点を曖昧に処理している研究者が圧倒的に多い³¹。

筆者は原作を精読する過程で、従来看過されたであろういくつかの問題に疑問をいただき、それらを切り口としてさらに踏み込んだ調査を行った結果、それらの疑問を解くカギを得ることができた。

まず一点目は、問題人物の専門分野の違いである。いままでこれに関する研究報告は見たことがない。

信憑性が高い一次資料を調べて判明したことだが、丁瓚、呉在東両氏は40年代初頭の中国において、ともに医療界で指導的な立場にいる学者兼名医であった。しかし、夏衍が言っていた「10年ぶりの再会を果たした」旧友Tは専門が医療心理学であり、一方Wは放射能病理学であった。作品に頻繁に出てくるネズミ、ノミ、シラミ、寄生虫などといった微生物研究および伝染病防止用ワクチン研究には、二人とも携わった経歴はない。夏衍から専門分野のアドバイスを求められたことはあり得なくもない。どのような参考書、そしてどこで入手するかくらいのアドバイスがいただけても、丁、呉の話の聞き、彼らをモデルにして細菌研究者の日常がリアルに描けるとは到底思えない。しかも、呉は桂林で初めて知った人物である。

二点目は、日本留学の経歴の有無と戦時中の上海自然科学研究所との関わりの有無である。これこそモデルとなる人物を特定することができる最も重要なポイントではないかと筆者は考えているが、残念ながらこの点は従来の研究で問題視すらされたことはなかった。

主人公ドクター兪は日本留学の経歴を有する在日中国人研究者である。日本で博士号を取得し、東京のとある研究機関に勤めている。一方、丁、呉両氏は、経歴といい職歴といい、いずれも日本とは無関係である。呉氏は30年代にイギリスとドイツに、丁氏は1947年から1年間アメリカのシカゴ大学に留学した経験をもつのみである。しかも二人とも博士号は持っていない。さらに、二人は日本政府が団匪賠償金を財源に「対支文化事業」の一環として上海で設立した自然科学研究所との接点も皆無である。

三点目は、主人公の家族構成である。

日本とは主人公ドクター兪一人だけが関わっているわけではない。妻静子は日本人であり、中国人を父、日本人を母にもつハーフの娘寿美子もいる。このような主人公の家族構成のセッティングには、明らかに登場人物を通して中日関係を反映したいという作者の意図があると思われる。対する丁、呉両氏にはこういった要素も一切ない。

30 陳堅「『法西斯細菌』主題弁識」、『杭州大学学报』18-4。

31 たとえば、魯虹「夏衍写『法西斯細菌』」『戯劇文学』1986-3。

以上に挙げた三つの点で、丁、呉両氏が主人公俞実夫のモデルではない、ということが検証できたと筆者は考える。

いままでの研究で気づかれなかったかもしれないが、これらの要素を欠かさずに備えていて、しかも作者夏衍氏とは1929年から比較的密な付き合いを有する人物は実在していたのである。

この人物とは、1931年から1945年までの間、上海自然科学研究所衛生科に専任研究員として勤め、抗戦終了後「漢奸」の汚名を背負ったまま1952年日本で客死した細菌学者の陶晶孫 (Jingsun Tao, 1987-1952) である。イニシャルの「T」も夏衍が言っていた「T氏」に合致する。

夏衍と陶晶孫は1929年に上海で「大衆文学」運動や映画、演劇改革運動を推進していた文学者仲間だった。ここに、夏衍全集にも収録されていない一枚の古い写真を添付するが、二人の文学活動を記録した貴重な文壇史料として参照されたい。1930年3月21日上海芸術劇社が北四川路にある上海演芸館（現在の永安歓楽広場）でレマルク原作、村山知義脚色の『西部戦線異状なし』を上演する際劇場の入り口で撮った上演記念写真だが、向かって左側は陶晶孫、右側は夏衍である。新劇『西部戦線異状なし』では、陶晶孫は音響効果、夏衍は照明を担当していた。



(左から陶晶孫、夏衍)

では、同じ時期に上海自然科学研究所に勤めていた別の中国人研究者の可能性はないのか。念のためにこの点についても調査した。

上海自然科学研究所が正式に開所したのは1931年4月1日で、陶晶孫が招聘を受けて赴任したのは同年11月だった。開所時から同所にはほかに楊自滄と沈璿という中国人研究員がいた。楊は同所設立準備委員会のメンバーの一人で、同研究所細菌学科を立ち上げた才能高き研究者だが、開所後間もなく不治の病を患い故人となった。もう一人の沈は長くいたが、専門は天文学であった。夏衍という人物には共産党員と劇作家との二つの顔があるが、どれも楊、沈とのつながりはないのである³²。

それでは、陶晶孫について、もう少し詳しく見てみよう。まず、彼は前期創造社同人の一人だった。1923年3月九州帝国大学医学部卒業後、恋人の佐藤みさを（郭沫若の日本人妻佐藤をとみの実の妹）がいる仙台に赴き、東北帝国大学理学部物理学教室に進学した。同大学医学部藤田敏彦教授の回想記『陶晶孫君を憶う』³³によれば、陶は東北大学在学中、医学部生理学藤田教室で電気生理学の実験も行っていた。仙台には数年間滞在し、その間佐藤みさをと結婚した。陶は1926年に医師の資格を取得し、9月に東京大学医学部副手のポストについた³⁴。東大にいたころ財団法人泉橋慈善病院（現在の三井記念病院）の非常勤勤務医を兼任していた。1928年

32 上海自然科学研究所の設立や人員配置については、佐伯修『上海自然科学研究所——科学者たちの日中戦争』に詳しい。

33 『日本医事新報』No.1815、1959年2月。

34 巖安生『陶晶孫 その数奇な生涯——もう一つの中国人留学精神史』第259頁、岩波書店2009年3月25日。

東大医学部副手の任期満了にともない、陶は上海東南大学医学部から教授として招聘され、家族を連れて帰国した。『ファッショ細菌』では、主人公のドクター兪は上海自然科学研究所に赴任するために東京の研究所を辞めて帰国したとなっているが、現実の中の陶晶孫の帰国は上海自然科学研究所ではなく、上海東南大学の招聘に応じたものであった。ストーリーの素材は明らかに陶晶孫から得たものの、あたかもフィクション、または違う人物の出来事のように夏衍が操作したと考えてもよからう。



(元上海自然科学研究所の本館は今中国科学院生物化学と細胞生物学研究所の一部になっている)

陶晶孫は帰国してから度々故郷の無錫に戻り、期間は短かったが故郷で開業医もやっていた。農村の劣悪な衛生状態を目のあたりにし、猛威を振るっている伝染病がしばしば飲み水、ハエ、蚊、ネズミ、ノミおよび虱を媒介にして広がったことを知ることになったことで、学問への関心が次第に生理学から公衆衛生学へと向きはじめ、そして自分の使命として何よりもまず伝染病を防ぐワクチンの研究開発をしようと心に決めたのはこの時期だった。これが上海東南大学医学部教授という、地位も給料も高かった職にいるにもかかわらず、あえて上海自然科学研究所の招聘に応じた最大の理由ではないかと筆者は考える。

なぜ日本外務省の管轄下にある細菌研究所が、開所早々上海にいる中国人陶晶孫を専任研究員として指名招聘をしたのかについては、従来それに言及した史料はない。筆者はその人事の背後に同研究所の横手千代之助初代所長の力強い推薦があったのではないかと推断している。横手氏は所長³⁵として上海に赴任する前は東京帝国大学医学部衛生学教室の主任教授を務めていた東大医学部の有名人物で、陶晶孫が上海自然科学研究所衛生科にいたころに、数多くの業績を出していた同僚だった小宮義孝氏も横手氏の弟子だった。陶晶孫は1926年から1928年まで東大医学部副手を2年間勤めていたので、その才能が横手教授に買われた、ということがあっても別段おかしくないだろう。

『ファッショ細菌』の主人公ドクター兪と、実在した科学者陶晶孫の関連性に関して、筆者はさらに上海自然科学研究所在職時の陶の研究内容を調べた。中国科学院生物化学と細胞生物学研究所（神経科学研究所の看板も掲げてある）関係者の協力を得て、貴重なデータを入手できた。

『上海自然科学研究所彙報』に発表されている陶の研究論文（単著と共著）を発表順にリストアップすると、研究内容が「民国江蘇地方ニ於ケル痘瘡豫防及ビ罹患ニ関スル調査」、「蠅ニヨル寄生蟲卵傳播」、「肝吸蟲ノ人体感染状態」、「中国人学童及ビ生徒間ニ於ケル腸内寄生蠕蟲検査」、「日華人飲食店従業者間ニ於ケル腸内寄生蠕蟲検査」、「上海ニ流行セル風疹」など11本もあり、故郷無錫を「衛生実験模範区」にして江南地域全体の中日両国人や家畜についての寄生虫蔓延の実態調査も行っていたことが判明した。これらの研究の実績を見て、『ファッショ細菌』で描かれた主人公ドクター兪の研究、生活の場所、微生物研究に対する献身的な姿勢およ

35 同所に関する外務所記録では「所長」ではなく、「署理」という言葉が使われている。

び作品から滲み出た温和な人柄など、実在する人物である陶晶孫のことを髣髴させられずにはいられまい。

では、兪、陶二人の主な共通点と相違点を整理してみよう。

一：医学を学ぶために日本留学したこと³⁶。

二：専門が医療衛生学で、微生物や寄生虫による伝染病防止用ワクチン研究に従事していたこと。

三：妻が日本人であること。子供がいること。

二人の人物の主な相違点に関しては、細かいことはさておき、最大の違いは二つある。

一つ目は、事件発生の舞台が必ずしも一致しないことである。つまり、作中のドクター兪は研究が続けられる場所を求めて上海から香港へ、そして香港から桂林へと戦火から逃れていく。対する陶晶孫は1931年11月現地採用の専任研究員として上海自然科学研究所に勤め、そして1945年8月戦争終了までずっと同研究所にとどまっていた。

二つ目は、戦争への認識が異なることである。つまり、作中の兪実夫は「人類を疫病から救う研究」を続けるために超然的な人生観をもっていたが、結局侵略戦争で窮地に追い込まれた。最後には科学至上、科学救国の夢から目覚め、自ら反戦に加わる。対する陶晶孫は上海自然科学研究所にいたおかげで、戦争の被害をほとんどうけずに医学研究に専念できた。その戦争に協力したと思われる言動とえば、第三回大東亜文学者大会に出席したこと以外は指摘すべきことは特にないが、反対するという意思表示もなかった³⁷。

一方、共産党幹部である夏衍は蘆溝橋事件勃発後に「孤島」化された上海を脱出したので、日中戦争開始後の上海自然科学研究所のことは知らないはずだったが、『ファッシュ細菌』に見られるような典型的中国人知識人の精神面の変貌を問題にしたのは、その背後に敵の後方にいる科学者の友人の覚醒を促したい動機があるからだろう。さらに、ドクター兪が科学救国、科学至上主義の夢から目覚め、医者として抗日活動に加わろうとした思想への激変には、共産党員である夏衍が、幅広い知識人の読者や観衆に伝えたいメッセージがあると言っても過言ではない。そのメッセージとは、ファシズムが世の中に存在する限り、戦争や疫病は絶対に無くならない。民族を戦争の災難から救いたければ、ドクター兪のように抗戦に身を投じるしか生きる道はないという作者の思想である。

36 陶晶孫は夏衍と知り合う前、東北大学物理教室にはいたが、単位取得で退学して東大医学部副手となった。学位請求論文『蠅に依る寄生虫卵伝播に就いて』を千葉大学に提出し、医学博士学位を取得したのは1951年11月14日だった。

37 1944年11月12-14日に事実上日本が主催した国策大会「第三回大東亜文学者大会」が南京で開かれ、陶晶孫は華南地域の文学者代表として出席した。翌年日本敗戦後、上海自然科学研究所は中国側の手に渡るが、陶は直ちに国民政府から南京の日本軍病院の接収を命じられ、その後、同じ政府命令で台北大学の接収をしに台湾に渡った。

結びに代えて：『ファッショ細菌』に見る反戦的性格

既述のように、『ファッショ細菌』という戯曲は日中両国交戦中、そして太平洋戦争勃発後の1942年に共産党系の文学者夏衍が書いたもので、同時代に重慶で発行、出版された数多くの文芸作品に見られる反戦的性格を有している。

1937年から1945年までの中国現代文学にある反戦的性格は、文学者が作品を描く際、照準をどこに、または何に当てるかで、大きく二つの大きなパターンに分かれる。照準を「敵軍」という対象に当てて描く場合は、敵がいかに冷酷で残忍な殺人鬼であるか、武器を持たない自国民がいかに武装した侵略者に蹂躪されているかを中心に書き、照準を「味方の軍」に当てる場合は、敵に立ち向かうときいかに勇敢で死を恐れないかを大きく書きたてる。しかも戦争が現在進行形なので、宣伝性が反戦文学の一番の特徴といえよう。むろん、味方の士気を鼓舞するために敵を極端に悪魔化し矮小化する傾向もよく見られる。

しかし、『ファッショ細菌』という作品はそれらのどれにも該当しない。というのは、共産党員である作者の意図は、抗戦に関心をもたない知識人同胞の覚醒と抗戦参加にあるからである。知識人の「典型的人物」に選ばれたドクター爺に似ている人は国外にもいれば、国内の「淪陷区」³⁸や「国統区」にも大勢いた。これこそ当時中国の現実であった。とくに「淪陷区」にいた知識人たちにとって、この作品は特別な意味がある。彼らは「淪陷区」にいた、あるいは占領者に雇われただけで敵に協力したと見なされ、しばしば「解放区」「国統区」の人々から「漢奸」呼ばわりされていた。そして一旦そういう汚名をかぶると一生名誉挽回ができない。

そういう意味で、『ファッショ細菌』は文学作品として価値があるだけでなく、戦時中にある種の情報発信の機能も十分果たしたといえる。今まで科学至上主義を信じていたのが間違いだった。敵や悪と戦わなければ、そして勝たなければ世の中は決してよくなる。ほんとうに祖国を愛しているなら、いまから反戦に奮起しても遅くない、という強いメッセージをずっと発信していた。実際、当時は数多くの知識青年が反戦文学や演劇などに接したおかげで覚醒し、そして新たな人生の目標を求めするために抗日前線や「解放区」に赴いたのである。

38 日中戦争時に国民党政府軍の支配地域は「国統区」、共産党軍の支配区域は「解放区」、日本軍に占領された区域は「淪陷区」とそれぞれ呼ばれていた。